淡窓伝光霊流日本詩道会
佐伯詩道会支部二十周年記念大会によせて

市野瀬　仁
（会員・佐伯市長島）

本年、九月二十三日（日）秋分の日、佐伯文化会館に於て、佐伯詩道会支部の二十周年記念大会が催されることになっています。このことについて、本流派の由来と大会の目玉をご紹介いたしたいと思います。

広瀬淡窓は江戸末期、日田に生れた学者、教育者、詩人としてその名を日本歴史の上に記されています。一方、深田光霊は名を光といい、大野郡緒方町出身七十四才で現在活躍中であります。大正十一年、県立竹田中学に入学、大阿蘇を中心とする秀麗な山に囲まれた地理的環境と、岡城のふもと竹田の町に多感な青春時代を過しました。その頃、咸宜園の影響が山間の町に及んでいて、天性の美声をもつ母の血を受けついでか、吟詠詩道に心をひかれるようになったと自ら述懐しておられます。

以来、広瀬淡窓を家元に仰ぎ、光霊流をあみだして宗家となり、吟界の第一人者となられていることは人の知るところであります。とはいっても、吟界に無縁の人は知らない方が多いと思いますので、吟界の一端と、それに関する深田光霊の略歴をご紹介いたしましょう。

現在、詩吟人口は全国に約四百万、流派の数三百有余、関西を中心に北海道から沖縄まで分布しています。この中、万単位の流派が五つ位あって光霊流はその一つにはいっております。ついでに、佐伯市にある関西詩吟と岳星会も歴史は古く万単位の流派であります。

略歴

。　昭和十二年中津中学に奉職して、津久見高等学校校長で定年退職するまで学校教育と吟詠指導に尽瘁（すい）されました。その時より今日まで、テレビ・ラジオで全国放送

すること三百回余に及びます。

。　津久見高等学校校長に赴任するや、ここの生徒にプライドを持たせるには、スポーツを最上の方針と定めたと聞いています。果せるかな宗家の在職中に、野球部が昭和四十二年の春と昭和四十七年の夏の甲子園に優勝を遂げています。これも「一道入魂他念なし」とする詩道精神からきりはなせないものとご自身語っておられます。

。　昭和十五年、吟詠の旅にアジア大陸へ行くことをかわきりに、昭和二十八年アメリカミシガン州の州立ウエイン大学大学院に留学、昭和四十四年ヨーロッパへ旅をしています。

。　淡窓伝光霊流日本詩道会会長

。　日本コロンビア音楽会会長

。　九州地区連絡協議会初代会長

。　財団法人日本吟剣詩舞振興会常任理事

。　吟界に前例のない文部大臣賞受賞

。　著書

吟剣詩舞道漢詩集・万葉集音韻考・定家と西行論

。　詩碑の建立

平和の詩碑　　三重町

詩道魂碑　　中津市

福沢諭吉先生の詩碑　　中津市

広瀬淡窓先生の詩碑　　日田市

広瀬淡窓先生の詩碑　　大分市

霊山の詩碑　　大分市

毛利空桑先生の詩碑　　大分市

西都の月の詩碑　　宮崎県西都市

光霊流の特徴は、漢詩、近代詩、短歌、俳句、今様等デパートリーが広いこと。音程、アクセントにきびしく音楽理論の基礎に立っていること。吟調は素朴を第一として、しかも流麗、一見矛盾するように見えますが、百聞一見にしかずといいたいところ。

さて、今回の大会責任者は佐伯詩道会会長岩崎陽二、八段にして師範。吟歴四十数年のベテラン。今回の大会をご自身の吟歴からみて何か期することがうかがわれ、二つの目玉をもって臨みたいと考えているようです。

一つは、佐伯・津久見・臼杵・鶴崎・大分・別府・杵築・宇佐・中津・豊前・延岡等の各支部から、最もすぐれた若手の男女一名ずつの吟士の競吟。

一つは、「詠佐伯ヲ」をテーマに佐伯藩の学者・国木田独歩、中根貞彦等の漢詩、近代詩、短歌を通しての構成吟等であります。

このことについて、構成吟のシナリオを私が依頼されましたので左の通り作ってみました。

構成吟：　詠佐伯ヲ

佐伯藩八代の藩主毛利高標は学問を好み、安永六年（一七七七）四教堂という藩校を設けて子弟の教育に当らせました。天明元年（一七八一）には、城中に佐伯文庫を設け、その数実に八万余の書物を蔵しました。世に寛政の学者三大名の一人と称されたのも当然のことといえましょう。

さてこれより登場する人物は、高標公の設けた四教堂が因となり縁となり果となって、歴史の糸で結ばれていくのです。

寛政六年（一七九四）高標公は、当時日田にいた久留米出身の松下筑陰の学識の深いことを知り、佐伯に招いて四教堂の師範といたします。翌寛政七年の春四月、広瀬淡窓は旧師を慕って佐伯にまいりました。久住高原を通り、竹田を経て徒歩にして八日目に佐伯に着きました。幼名寅之助、時に歳十四歳。その道程は一五〇㎞、体の弱い淡窓にとっては、ひどくこたえたものでありました。しかし、道を求める一つの試練でもあったでしょう。

淡窓は後年、恐しい旅を追憶して、道中の中ノ谷の一夜を次の詩に残しています。

中ノ谷寥寥、人行カズ
陰雲堆裏　柴荆ニ宿ル
乳狼、夜半ニ来リテ食ヲ尋メ
一径ノ菅茅、踏ンデ声アリ

中の谷は人通りもないさびしい所で、空には陰気な雲がいっぱい立ちこめている。行きくれて、一軒のあばら屋にとまったが、このあたりは夜中になると、乳のみ子をかかえた狼が食い物をさがして、かやの中の一本道をやってくる。そのかやを踏む無気味な声がカサカサと聞えてくるという意味であります。

佐伯に着いた淡窓は、筑陰の宅の人となります。し

かし病弱のために、四教堂の学生に交って勉学を共にした在伯期間はわずか四ケ月ばかりでありました。……で淡窓の佐伯の印象と楽しい思い出の絶句二首をご紹介いたしましょう。

始めに「詠佐伯」の一首を○○○○○に吟じてもらいましょう。

「鶴城/楼閣海之濱　松、緑沙明不起塵
百浦魚塩民自富　風帆相接浪華津」

つづきまして「月夜佐伯浮舟」の一首を○○○○○に吟じてもらいましょう。

「羽明山下水初波　龍護寺前移棹過
幾隊/画船斉浮月　繁絃争奏竹枝/歌」

「註」竹枝の歌とは、その地方の歌の意。

月夜の一夜、淡窓は筑陰等の舟遊びに加わわりました。番匠川を上り龍護寺の河畔で、多くの遊覧船にまじって、佐伯地方の歌を競うのを聞きながら楽しみました。横笛の名人といわれた筑陰はこの時、得意の笛を吹いて興じたといいます。後、日田の咸宜園では塾生徒が、吟詠の伴奏に竹笛を吹いたと伝えられていますが、これも師筑陰のえいきょうでしょうか。

中島子玉は佐伯藩士中島幹右衛門の長男として佐伯の鉄砲町に生れました。十代の藩主毛利高翰は、文化十三年（一八一六）十六才の中島子玉を広瀬淡窓に学資を給して学ばせました。一年を経て子玉の俊才ぶりに驚き「余人を教えてより以来、人才此人を以て第一とす」と淡窓をして語らせました。翌十四年、頼山陽が淡窓を訪ねたとき、淡窓は頼山陽に子玉の詩文を見せたところ、山陽は「自分は西遊して山水に耶馬渓を得、人材に中島子玉を得た」と語ったといわれています。

文政五年（一八二二）子玉は江戸に上り、幕府の昌平校に学びます。やがて、抜きん出た学才を認められ斉長いまの図書館長に任ぜられました。こうして勉学すること数年、文政十一年（一八二八）佐伯に帰り藩主の恩義を感じて四教堂の教授となり、子弟の指導に当りました。天保五年（一八三四）破傷風にかかり、自分の命を知ってか、辞世の詩を残しています。それを○○○○○の吟で鑑賞いたしましょう。

「高情自違世人　我是南豊一布衣
三十六鱗猶欠二　今朝天上飛龍化」

「註」布衣ー身分の低い者

子玉の人並みはずれた高邁な心意気に圧倒される思いがいたしませんでしょうか。

三十四才の若さで散った子玉の墓は、佐伯市久成寺内にあり、墓碑名は師広瀬淡窓の撰となっております。

明石秋室は杵築藩士豊田八蔵の二男に生れました。後、佐伯藩士明石条左衛門の養子にむかえられることになります。佐伯に来るにあたって秋室の言うには「佐伯藩は小藩で意に満たないが、佐伯藩の史書は天下に冠たるものがあると聞くから、若し自分を史書監督に当らせるならば喜んで承諾するであろう」と。九代の藩主毛利高誠にこのことが耳に入り「本人の希望にまかせる」との内命があったので、養子縁組はまとまりました。

文政三年（一八二〇）書物奉行を命ぜられ、その任実に十八年の久しきに及びました。秋室は学問も深く書画に秀で、その作品も「人に請う者あるも敢えて許さず」として、作品を焼き捨てるか、土中深く埋めたという話は、秋室の人を相手にせず天を相手とした奇才の片鱗をうかがわせます。

秋室が蒲江浦に遊んだとき、入津坂を登りつめて南北の気温の違う風景をよんだ「入津坂」があります。それを○○○○○○吟で聞きましょう。

「欲下入津雲坂長　俄驚気候変炎涼
横空一嶺界南北　北麦青々南麦黄」

この詩を上入津の畑ノ浦分会は、入津坂に石碑を建てようという話がおきています。

文学を通して佐伯の自然と風物を天下に紹介したのは国木田独歩であります。源叔父、春の鳥、鹿狩、欺かざるの記の名作は、佐伯の風物が遺憾なく描かれています。

独歩はどうして佐伯に来たのでしょうか。その経緯は次のようであります。

明治維新により、日本の政治制度は一変しました。十三代の毛利高範は、明治四年に廃止された四教堂にかわって、明治二十三年鶴谷学館を開設して中等教育をすすめました。鶴谷学館には英語と数学の適当な教師がいなかったので、かつて四教堂で学び後、日本歴史上に残る佐伯出身の唯一人の人物、矢野龍渓にそ

の選考を依頼しました。龍渓は国民新聞の社長であった徳富蘇峰から東京専門学校の英語を学んだ国木田独歩を推薦されました。独歩も東京で悶々の日々を送っていた頃で、蘇峰、龍渓二人の激励を受けて佐伯に来ることになったのであります。

明治二十六年九月三十日、二十三才の独歩は弟収二と佐伯の人となり、二十七年八月一日佐伯を去ります。この間、独歩は佐伯の自然に魅せられ、城山・煙草山・尺間山・彦岳・元越山など二度ならず三度も登っています。こうした佐伯における生活が、彼の文学の芽を育てたといってもよいでしょう。

中でも城山を愛し、始めて佐伯に来た翌日の十月一日に城山に登っています。「豊後の国佐伯」の「城山」と題する中に「余が初めて佐伯に入るや先づ此の山に心動き、余已に佐伯を去るも眼底其景容を拭い去る能はず。此の山なくば余には殆んど佐伯なきなり」とあります。

この文化会館のすぐ上の三ノ丸には「城山」と題する近代詩が石碑に刻まれています。この詩は、移り変る城山の四季を巧みにとらえ、絶妙な筆致で描き出しています。それでは近代詩「城山」を○○○○○○○の吟によって聞きましょう。

城　山

佐伯の春先づ城山に来り
夏先づ城山に来り
秋又早く城山に来り
冬はうど寒き風の音を先づ城山の林にきく也
城山寂たる時　佐伯寂たり
城山鳴る時　佐伯鳴る
佐伯は城山のものなればなり

中根貞彦は旧臼杵藩士片切八三郎の子でありました。十五才のとき、佐伯の百九銀行の初代頭取をつとめた旧佐伯藩士中根祚胤の養子となります。貞彦は長じて三和銀行頭取となり、戦前から戦後にかけて、日本財界の重鎮となりました。

貞彦の父八三郎は、明治十年西南戦争で、西郷軍が臼杵に侵入するや臼杵隊に加わり、これに抵抗して戦死したのです。母は当時姙(みこ)っており、明治十一年遺児貞彦を生みました。そして、貞彦三才にして母を喪い、

天涯の孤児となったのであります。

臼杵公園に建つ「孝道の歌碑」は人の涙をそそるものがあります。

ちちのみのちちは吾(わ)を見ずははそばの
　　ははははわが知らず恋しき父母

この歌に対して、佐伯文化会館に建つ「望郷の歌」は、ふるさとは移りかわっても変らなくとも、いとほしいものであるという意味の歌であります。

それでは「望郷の歌」を○○○○に朗詠してもらいましょう。

ふるさとの移ろうも憂しふるさとの
　　変らぬもうしはしきふる里

以上、佐伯を詠じた漢詩、近代詩、短歌をそれぞれ吟じてまいりました。これ等すべて、二百年前藩主毛利高標公の建てられた四教堂で学んだ人々の産物であります。これを思うとき、学問、芸術の永遠性をしみじみと感ずると共に、私達佐伯人は之等文化遺産をしっかり守り後世に伝えねばならないと覚悟を新たにするものであります。

このままの朗読では硬すぎますので、演技の中にスライドを投影し、中ほどに佐伯小唄を琴の伴奏で踊って気分をやわらげていくことになっています。果たしてどんな結果になるやら、私達に不安もありますが期待にそうよう練習を重ねていかねばなりません。

皆様、気がむきましたらお出下さって、ご批判を聞かせて下さいませんか。

構成吟の参考文献

。佐伯市史
。郷土の先覚者シリーズ　第三集・第七集
。広瀬淡窓夜話　　大久保正尾著
。大分県偉人伝
。大分県人名録
。淡窓伝光霊流詩道五十周年記念